

「聖霊の風、御言葉の雨」

古代イスラエルの詩人たち、文筆家たちの優れた言語感覚に、時々、ハッとさせられることがあります。もう早速、今日の説教の要約ですけれども、「聖霊は風のように広く行き渡り、御言葉は雨のように深く沁み渡る」ということです。これは、神様が示された真理であると同時に、当時の詩人や文筆家たちが感じ取った聖霊と御言葉の印象的な姿であります。

先週は、ペンテコステ礼拝でした。風が吹いて、聖霊に満たされた人々が多種多様な言葉を語り出し、そして、ペトロさんは力強く主の御言葉を取り次ぎました。その結果、多くのキリスト者が生み出され、ペンテコステは教会の誕生日であると言われるようになりました。この出来事を言い換えて表現するなら、ペンテコステという日は、「広がり」や「拡散」の出来事だということ。自然においては、草木の種を運び、砂を運び、雲を運ぶ風が、ペンテコステにおいては聖霊を運び、多くの人に気付きと感化を与え、信仰を根付かせ、芽吹かせ、教会の誕生と為さしめたのです。ペンテコステの大切な象徴、重要な出来事が「風」であるのは、本当に印象ぴったりなんですね。聖霊は、「雨」でもなく「光」でもなく、「風」と共に現れないといけない理由が、ちゃんとあったのです。聖霊とは、「光」や「雨」のように天から注がれるだけじゃ不十分であり、この地上にあって一か所に留まらず、吹き抜けていく必要があった。神様は、多くの人に信仰の種を蒔くために、聖霊が広がり、拡散するために「風」を用いようとお考えになり、そして、ペンテコステの出来事を見聞きした当時の人々は、確かにその出来事の内に「風」のような聖霊の存在を感じ取ったのです。聖霊の姿が捉えにくいのも、信仰の種蒔きに忙しく行き交っているからかも知れませんね。

一方で、「御言葉」は「雨」のように降らせるものだ、と神様はお考えになり、人々もそのように

受け止め、理解しました。「わたしの教えは雨のように降り注ぎ、わたしの言葉は露のように滴る。若草の上に降る小雨のように、青草の上に降り注ぐ夕立のように」。もっとも、今日の聖書箇所における「わたし」とは、神様ご自身のことではなく、この歌を語り聞かせたモーセさんであると言えます。が、ただ、間違いなく、その教えと言葉の大元は、神様に間違いありません。要するに、教えや言葉というのは、吹き抜けていくのではなく、濡らし、滴り、沁み込むという、風にはない性質のものだということです。これは、少なくとも私にとっては非常に重要な考え方です。と言うのも、教えや言葉は、吹き抜けていったら、あんまりよろしくないんですよ。聞き流したり、右耳から左耳へと通り抜けてしまったりするものじゃないんです。御言葉は、私たちの心に深く沁み渡るものである、と。吹き抜けていくのではなくてですね。それが神様の御考えであり、また、当時の人々の御言葉に対する理解でもありました。

私たちの教会は、プロテスタントという立場を取ります。プロテスタントは「御言葉による礼拝」を重んじる傾向があります。神秘的な儀式や儀礼ではなく、美しい絵画や彫刻ではなく、気分を高揚させる音楽や雰囲気ではなく、この聖書に記されている御言葉にしっかりと向き合い、聖書から与えられる雨のような御言葉の一つ一つを受け止めて、しっかりと胸に沁み込ませていく。それによって私たちは養われ、神様とイエス様の恵みを頂くこととなります。この一連の所作は、時間が掛かりますし、御言葉を読み込んだり、解き明かしたりするのは、なかなか骨の折れる取り組みです。でも、それが大事。まあ、あまり雨に濡れることを好む人はいないかも知れませんが、でも、せっかく私たちの手元には、豊かな御言葉の源泉である聖書があるわけなので、時には、御言葉の雨を浴びてみるのは良いかと思います。もちろん、この礼拝が、御言葉の雨を浴びるひと時ではあるわけですが、どうぞ平日や、ご家庭でも、ですね。

ちなみに、今日の聖書箇所において、御言葉の雨に降られたのは、出エジプトを果たしたイスラ

エルの人々でした。しかし、その御言葉は、決して喜びや福音をもたらす雨ではありませんでした。どちらかと言うと、戒めと悔い改めの雨でした。この時、イスラエルの指導者だったモーセさんは、自分の死ぬことを悟り、思い巡らせていました。「自分が生きている時でさえ、イスラエルの人々は神様に対して無礼な罪を重ねたのに、自分が死んでしまった後は、どんなことになってしまうのか」という心配を、モーセさんは抱えていました。その上で、今日の聖書箇所にある歌が語られたのです。5節6節の言葉は、辛辣です。「不正を好む曲がった世代はしかし、神を離れ／その傷ゆえに、もはや神の子らではない」。「不正を好む曲がった世代」とは、エジプトを脱出した後、その不正の故に40年間、荒れ野を彷徨うことを強いられ、そして、この世を去った人々のことです。そういう残念な世代が過去にあったことを思い起こさせ、「愚かで知恵のない民よ」という厳しい呼びかけで後悔と反省を促していきます。現代を生きる私たちは、当然、出エジプトを経験した古代イスラエル人とは違います。時代も文化も状況も、すべてが異なります。なので、この厳しくて冷たい雨のような御言葉に寒々しく濡れる必要はありません。ただ、当時、十の戒めを授けられ、その上で失敗し、反省を促され、傘もささず、カップも着ずに、御言葉の雨に濡れるがまま立ち尽くした人々がいたことは知っておくべきです。そして、この冷たい御言葉の雨に濡れた出来事を忘れずに、申命記という書を記し、聖書という本にまとめ残した人々がいたことも忘れないでいたいと思います。

風のように吹き抜ける聖霊によって信仰の種を蒔かれた人々は、御言葉という雨によって養われ、育まれ、成長していきます。神様は、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」、そんな方です。その雨の先にあるのは、ひまわりのような大輪の花なのか、竹のように数百年に一度しか咲かない花なのか、カスミソウみたいな小さな花かも知れないし、そもそも花の咲かない種類なのかも知れないし、いやいやもしかしたら胡蝶蘭やバラのよ

うな絢爛豪華な花かも知れないし。でも、いずれにしても、御言葉を浴びて生きた先には、きっと神様の御心に適う、そして、自分自身にとっても幸せな、そんな私たちの姿があるんじゃないかと思えます。

ペンテコステを過ごし、再びこうして御言葉の礼拝を捧げる私たちは、風のような聖霊と雨のような御言葉を感じつつ、そこに込められた神様の御心に思いを巡らせていたいと思えます。聖霊の風によって蒔かれた信仰の種を思い起こし、そこに注がれてきた御言葉の雨を振り返ってみる。そして、この先も、御言葉の雨によって養われ続けて行く自分の姿を思い描いてみる。時には、その雨を冷たく不快に感じることもあると思います。痛いところ突かれたなあと思うこともあるでしょう。しかし、一方で、乾いた地面に雨が沁み込むように潤い満たされる経験もあると思います。人生のハリツヤを取り戻すような瞬間もきっとあります。時に適って美しく、相応しい御言葉の雨を降らせてくださる神様の心意気を信頼し、感謝して、今週も歩んで参りましょう。御言葉によって励まされ、養われ、そして、喜びと幸いを感じることできる1週間となりますように。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちのために安息日を備え、そして、聖霊と御言葉とで私たちを満たして下さり、心から感謝致します。あなたは、この世界に聖霊を注いで教会を生み出し、そして、御言葉によって教会を育て、今、私たちが集っているこの敦賀教会を根付かせ、芽吹かせ、成長させてくださいました。その疑うことのできない真実と恵みとを憶えて、重ねて感謝を致します。どうか、これから先の未来も、あなたの御言葉の雨によって、私たちを養い、この教会を育み、主の栄光のために、教会学校と幼稚園に集う子ども達のために、この教会が建つ地域のために、良き業を為していくことができますように。私たち一人一人が滋養に満ちた御言葉を浴びて、いつも健やかに、幸せに歩んでゆくことができますように。どうか支え、守り、導いてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

6月召天者を憶える祈り 詩編 33 編 12～15 節

いかに幸いなことか／主を神とする国／主が嗣業として選ばれた民は。

主は天から見渡し／人の子らをひとりひとり御覧になり

御座を置かれた所から／地に住むすべての人に目を留められる。

人の心をすべて造られた主は／彼らの業をことごとく見分けられる。

井上諭吉兄 いのうえ ゆきち けい (1991年6月8日)

源田きさ姉 げんだ きさ し (1985年6月12日)

橋本恵子姉 はしもと けいこ し (2014年6月12日)

野村芳枝姉 のむら よしえ し (2002年6月13日)

千波晴子姉 ちば はるこ し (1988年6月23日)

木下美邑姉 きのした みう し (2007年6月28日)

神様。私たちは今、あなたの知られざる御心によって、先に天へと召されし、6月の召天者の方々のことを憶えて、祈りを合わせています。信仰の先達のことを祈りに憶える時、私たちの想いは、この地上を離れ、はるかあなたの住まう天上へと及びます。今は、あなたの御腕に抱かれてとこしえの平安に内に憩うておられる方々に想いを馳せながら、いずれ来る再会の日を待ち望みます。この6月に召された方々と、未だ地上を生きる私たちとは、今は離れ離れに時を過ごしていますが、終わりの日には、あなたの御前において、再び相まみえることになるかと信じます。その来る日を目指して、私たちはあなたによって与えられた命を精一杯に燃やしつつ、主の民として相応しい生き様を示してゆくことができますように、あなたが導いてください。また、在りし日の方々の姿を心に浮かべることで励まされ、その信仰を受け継ぎ、次代へと伝えていくことができますように切に願います。天の上には限りない平安が、地の上には進むべき標と力強いお支えがありますように。この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。